

ふるさととは今



▲笹川の左岸にある鬼岩は、2千万年前頃の凝灰岩で奇岩として県の天然記念物に指定。鬼岩前の市道沿線にトロッコ軌道があり、石膏が運び出されていました。

鉱山の開発は明治42年、鵜鷺村（出雲市大社町）の山師商人・岡有一氏が仁万に宿泊した際に鬼村で石膏が採れることを知ったのがきっかけとなりました。大正7年（1918）、鉱山所有者の塩田万市氏が、大阪石膏株式会社を創立し鬼村松代出張所を置いて経営を行いました。

昭和初期の石膏生産は、島根県が全国生産量の7割以上を占めていたといわれます。

また、鉱山から産出した石膏は、開発当初は人が静間まで背負って運び、そこから荷車で和江港へ運んで船積みしていました。大正初年に輸送の不便さを解消するため、道路がつくられ馬車運搬になり、その後、道路に沿ってレールが敷かれトロッコ軌道が和江港まで整備され、昭和15年（1940）まで操業（静間軌道株式会社）されました。

鬼村鉱山は、昭和42年9月まで60年間操業が続きました。石こうの「膏」の字の使用も鬼村が最初であったといわれています。100年前の往時を偲ぶ面影は少なく、鉱山跡は竹藪に覆われ沼地となっており、貴重な歴史を伝える人は、今はいないということです。〔参考：鬼村下自治会会報（鬼村のむかし）より〕

鬼村鉱山跡への
行き方

JR静間駅から大屋方面（市道静間大屋線）車で15分
詳しくは、大屋まちづくりセンター（☎0854-82-5580）まで



▲鬼村鉱山への軌道跡と推測される道路（JR静間駅南側）

表紙 あの時～三瓶山西の原の風景（三瓶町）～

表紙の写真は現在のように植林されていない頃の三瓶山（西の原）の写真です。写真の撮られた正確な時期は不明ですが当時を知る三瓶町池田の村田有郷さんに話を聞かせていただきました。

三瓶山は大田市周辺地域の学校の遠足地として多くの人が集まっていました。当時の三瓶山は草原に覆われ、雄大な景色が広がっており、山頂まで登らずに大田市を一望できていました。草原が広がっていたため遠足で来た子供たちは山頂まで競争して登り、早い子供は30分ほどで登頂できたそうです。

現在の三瓶山は木で覆われた姿をしています。このような姿に変化してきたのは昭和46年の第22回全国植樹祭が契機となりました。国土緑化運動のために行われたこの植樹祭では島根県の木「クロマツ」の苗木1万9000本が植えられました。その後、昭和54年には県造林推進大会植樹祭が行われ、現在の三瓶山の姿へ変わっていきました。

現在、三瓶山西の原では、草原の景観や希少動植物の生息地として価値が見直され、草原の維持や火災防止を目的として毎年3月、野焼きが行われています。



三瓶山西の原

この情報誌は定住促進を目的に発行しています。

発行／大田市役所総務部まちづくり推進課 TEL：0854-82-1600 FAX：0854-82-5885

〒694-0064 島根県大田市大田町大田口1111番地 E-mail：o-matidukuri@iwamigin.jp <http://www.city.ohda.lg.jp/>

“おおだ”の定住サイト「どがどが」 <http://www.teiju-ohda.jp/>

どがどが 検索